

Eat Well, Live Well.



味の素グループの
生物多様性および気候変動への
取り組みと開示の状況

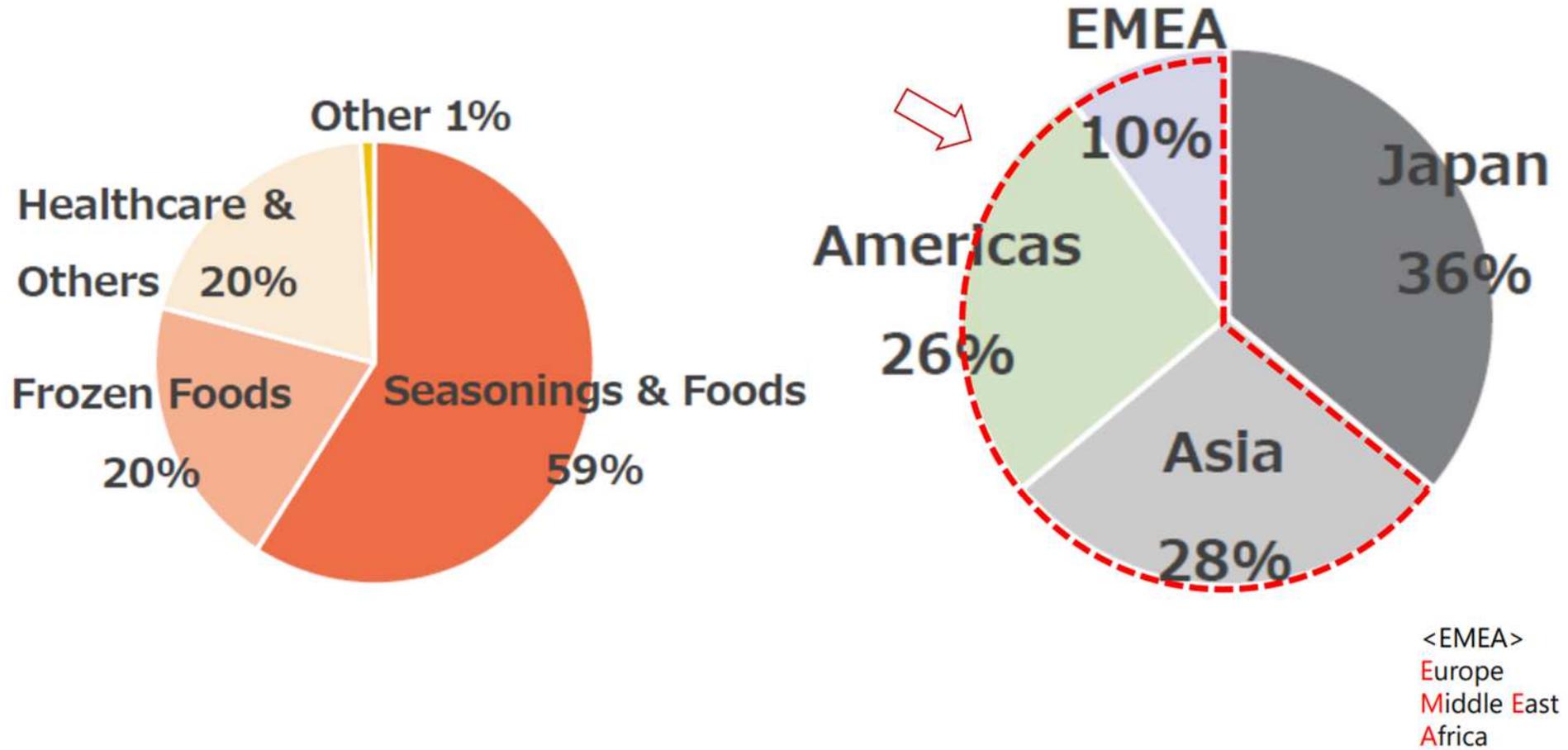
Feb. 27, 2025

味の素株式会社サステナビリティ推進部

太田史生

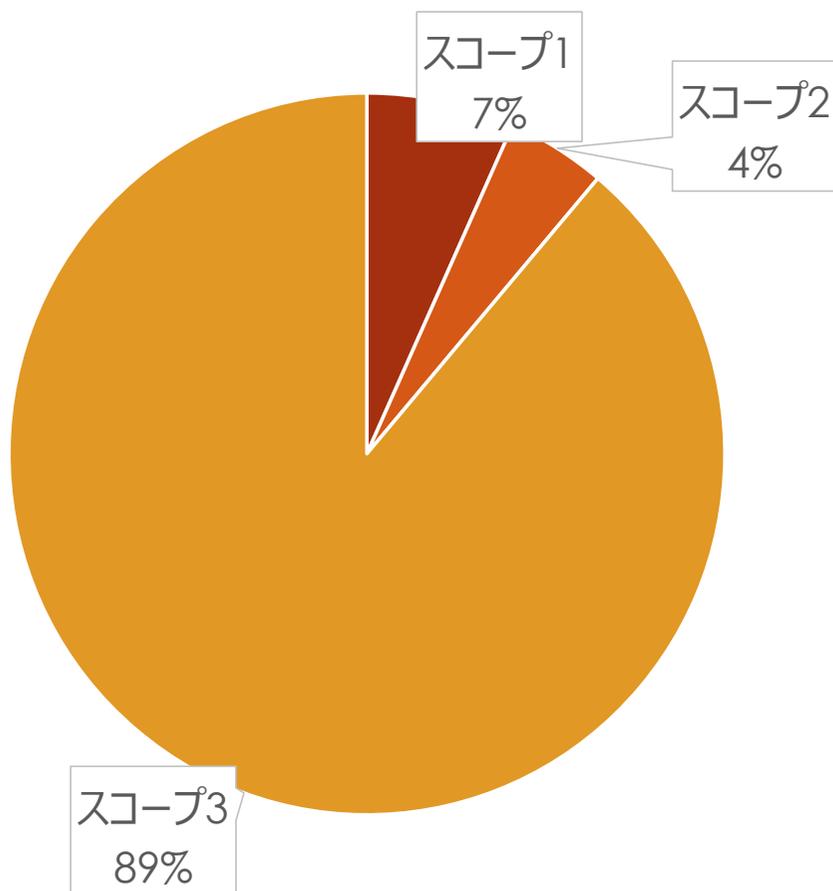
味の素グループの事業

売り上げの6割以上が海外



味の素グループのフットプリントの特徴

味の素グループのGHG排出の内訳



- 川上でのGHG排出や水使用量が多く、水や土地利用も同様に川上の方がはるかに大きいウェイトを占める。
- 自然に対するフットプリントでも原料や製品の生産の段階が大きい

気候変動の取り組み

- 2020年にSBTi 1.5℃シナリオに沿った目標を設定
- 現在は2030年までにスコープ1,2で50.4%削減、スコープ3で30%削減の目標を設定
- 気候変動については以下の事業範囲とシナリオで開示を実施

| | 2020年度 | 2021年度 | 2022年度 | 2023年度 |
|----------------|------------------------|------------------------|---------------------------|---|
| 事業 | うま味調味料（グローバル）、国内の主要な製品 | うま味調味料（グローバル）、国内の主要な製品 | うま味調味料（グローバル）、国内・海外の主要な製品 | うま味調味料（グローバル）、国内・海外の主要な製品に加えて、その他の加工食品等 |
| 発現の時期 | 2030年 | 2030年／2050年 | 2030年／2050年 | 2030年／2050年 |
| シナリオ | 2℃／4℃ | 2℃／4℃ | 1.5℃／4℃ | 1.5℃／4℃ |
| 売上高基準 カバレッジ | 24% | 24% | 55% | 65% |

自然資本に対する取り組み

- 2022年度からTNFDのLEAPアプローチに沿った分析に着手
- 全容の把握、トレーサビリティの確保から困難の連続

| | Locate | Evaluate | Assess |
|------|---|--|---|
| 分析概要 | サプライチェーンにおける生物多様性損失が大きい地域を把握 | サプライチェーンにおける自然への依存と影響の因子を特定 | 二つのシナリオでリスクと機会の大きさを特定 |
| ツール | ENCORE、SBT's High Impact Commodity Listなど | | |
| 結果 | 25-50kmの格子約2.4万か所のうち、生物多様性の重要性エリアや急速劣化エリアなどに該当するものは2万か所あった。 | 様々な自然劣化のパターンを見出した。例えばサトウキビ、トウモロコシ、ナタネの調達国での土質の劣化など可能性があることを見出した。 | 自然保全と経済発展が両立するシナリオSSP1と自然劣化、経済停滞となるシナリオSSP3の二つを分析し、慢性的な物理リスクによる原料調達価格の高騰リスクを見出した。 |

森林破壊ゼロのコミットメント



SBTiが気候変動目的で以下のコミットメントを要求



25年末までにGHG排出ネットゼロの一環として森林破壊ゼロも達成



対象となる原材料：牛、パーム油、大豆、紙・木材

森林破壊ゼロの取り組み

- 下のいずれか、あるいは組み合わせで取り組む。

認証品の購買

- 森林破壊ゼロをはじめとした基準を満たす認証品を購買する

低リスク国からの購買

- 森林破壊リスクが低い国からの購買

サプライヤーとの協働

- 森林破壊の無い産地からの購買であることをサプライヤーとともに確認

森林破壊ゼロの取り組みからのフィードバック

定量目標

- なぜやらなければいけないか、説明しやすい
- 進捗も把握しやすい

サプライヤーとの協働

- 川上のサプライチェーンとの協働は必須
- ここで得られるトレーサビリティ、サプライチェーンマップは他でも有用
- ここで得られたデータや体験は今後、生物多様性や自然資本への取り組みを進めるうえで重要な資産になり得る。
- 適切な指標さえ設定できれば、生物多様性の活動も加速できるのではないか。

気候変動は2020年以前
から、自然資本の分析は
2022年度から開始

徐々に分析を進捗させる
一方でリスクと機会の定量
には困難が伴う

気候変動対応の一つとし
ての森林破壊ゼロの取り
組みも着手

適切な指標、明確なゴー
ル、サプライヤー協働で自
然資本の取り組みも加速